

贈り物に込められた思い



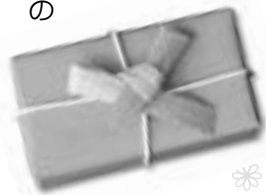
お中元やお歳暮、年賀や季節のあいさつなど、私たちはお世話になっていたり人や身近な人との間で、手土産や贈り物を渡したり、もらったりする機会があります。

そんなとき、贈り物を渡した相手の反応が今ひとつで落胆したり、逆に、いただいた物が期待はずれと感ずてしまつたことはないでしょうか。今回は、贈り物をいただく際に、単に物を受け取るのではなく、相手の気づかひや思いやりの心を受け取るこの大切さについて学びます。

## 楽しい時間を過ぐす

今年で社会人三年目の田中雪江さん（25歳）は、高校までは埼玉の実家で過ごし、大学時代から都内で一人暮らしを続けています。そんな雪江さんのもとに、福島のお母さんから一通の手紙が届きました。

した。そこには、お母さんの家族が元気で過ぐしている様子や、雪江さんの三歳年上のいとこの明美さんが、無事に女の子を出産したことなどが書かれています。そして最後に、「明美も子供のお披露





目をしたと言っています。雪江ちゃんの都合がよければ、ぜひ遊びに来てください」と結ばれていました。

中学生のころまでの雪江さんは、毎年福島へ出かけていましたが、高校生になると部活や勉強が忙しく、次第に足が遠のきました。大学生になってからは訪れることもなく、伯母さん一家との年賀状のやり取りだけが続いていました。

「伯母さんや明美ちゃんとは何年も会っていないし、不義理しているなあ。明美ちゃんの赤ちゃんかあ……、会って見てみたいな」

そんな思いが雪江さんの頭に浮かび、「よし、行ってこよう！」と週末を利用して福島まで一泊二日に出かける計画を

立てて、実行に移したのです。

※

「こんにちは、伯母さん。お手紙ありがとうございました。ほんとうにご無沙汰してしまつてごめんなさい」

雪江さんは軽く頭を下げ、出掛けに駅の売店で買ったお菓子の詰め合わせを渡しました。

「あらあら、申し訳ないねえ。雪江ちゃん、遠いところよく来たねえ。ありがとう」

伯母さんの昔と変わらない元気な様子を見て、中学時代の記憶がよみがえつてきました。家の奥から赤ちゃんを抱えた明美さんも顔を出し、「こんにちは。今、ちようど寝付いたところだから……」と小さな声で答えました。

茶の間で伯母さんとお互いの近況を話しているところに、子供を寝かし終えた明美さんが入ってきました。

「ごめんね、雪ちゃん。ちようどこつくりこつくりしたところだったから」

「こつちこそ、なんかタイミング悪くやつてきちゃつて、ごめんね」

「ううん、いいの、いいの。少しするとまた起きると思うから、そのときに顔を見てやつてね」

その日は、伯父さんや明美さんの夫も交えて、思い出話や子育ての話に花が咲きました。

楽しい時間を過ごした雪江さんは、久しぶりに泊まる伯母さんの家の布団の中で、＼来てよかつたな＼と思うのでした。

# 伯母さんが浮かべた表情



翌日のお昼過ぎ、雪江さんが帰る時間になりました。

「雪江ちゃん、東京で一人暮らしでしょ。ちやんと野菜食べてる？ うちの畑で採れたきゅうりやらトマトやら、持って帰るかい？」

伯母さんからすすめられ、雪江さんは「うれしい！ ありがとうございます」と答えました。

それを聞いた伯母さんは、家の裏の畑に行き、しばらくすると両手で抱えきれないほどの野菜を持って戻ってきました。「今日はいいきゅうりが生なっていたのよ。」

そうそう、とうもろこしもあるのよ。朝にもいでおいたから甘いわよ。それから隣の山田さん、雪江ちゃんが来るつて言ったら、キクラゲ、用意しておいてくれたから。それと、お向かいの佐藤のおばあちゃんからはナスビをいただいたから、今、袋に入れてあげるからね」

スーパーで売っている一ネットぐらいの野菜を想像していた雪江さんは、その量に目を丸くしました。あつという間に大きな紙袋が溢れんばかりにいっぱいになりました。

「こんなにたくさん……。まいったなあ、これから電車で何時間も乗らなければならぬし、重いし、かさばるから他の人の邪魔になるかもしれないし、野菜でいっぱい紙袋を下げて移動するのは、

恥ずかしい」

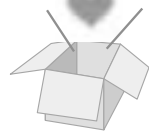
とつさにそう思った雪江さん。気安さもあつて、次のような言葉が口をついて出ました。

「伯母さん、気持ちはありませんが、こんなに食べきれないよ。第一、車で帰るんだから持ちきれないし」

伯母さんは一瞬、戸惑いを見せましたが、すぐに笑顔になり、「あら、ごめんね。久しぶりに雪江ちゃんに会えたから、うれしくなつて、気がつかなくつたわ。宅配便で送るわね」と、いつもの明るさで答えました。

その言葉を受けて一安心の雪江さんでしたが、伯母さんの浮かべた表情が少し気にかかりました。

# 少しでも喜んでもらいたい



帰宅した翌日、伯母さんから野菜が届きました。そこにはこんな手紙が添えられていました。

「この間は来てくれてありがとう。これを食べると元気で頑張つて。とうもろこしは多めに入れました。職場の人と食べてね。時間がたつとおいしさも半減するから、早めに茹でてね」

温かい心がこもった手紙を読み、雪江さんは伯母さんとのやり取りを思い出して、とても申し訳なく感じました。

早速、アドバイスどおり、鍋でとうもろこしを茹でました。そして、会社へ





持つていく準備を進めました。

翌日、出社した雪江さんは、給湯室の冷蔵庫に、所属する総務課の人数八人分のとうもろこしを入れました。

「いつ出そうかな、やつぱり三時かしら。朝一番からとうもろこしって、なかなか手を出しづらいだろうし。その前に、皆

さん、喜んでくださるかしら……」

雪江さんはそんなことを考え、ドキドキ、ソワソワしていました。そして、ふと、一昨日のことを思い出したのです。

「野菜を持つて帰るか」と私に聞いてくれたとき、伯母さんも今の私と同じで、一心に相手のことを思っていたんだろうな。私に喜んでもらおうとして、隣の山田さんやお向かいの佐藤のおばあちゃんにも声をかけてくれたのかもしれない。なのに、私ったら、帰りのことばかりを考えていて、伯母さんの気持ちを考えられなかった……」

「伯母さん、ごめんね」

そう独り言を言いました。

いよいよ三時、頃合いを見計らつてとうもろこしを電子レンジで温め、みんな



の前に出しました。

「これ、伯母が送ってくれたとうもろこしなんです。採れたてですから、どうぞ！」

そう言いながら手渡します。突然のとうもろこしの登場に、驚きながらもみんな受け取ってくれました。

「うまい！ 採れたては違うな」「なつかしいわ。小さいころ、よくこうして食べたの」

職場に笑顔が広がります。みんなが想像以上に喜ぶ顔を見て、伯母さんの相手を思う心づかいに、あらためて感謝の念が湧いてきました。

雪江さんは、帰宅後、すぐに伯母さんに手紙を書くことにしました。野菜が届いてうれしかったこと、会社の人にも喜



んでもらえたこと……。思いのままをつづりながら、「伯母さんみたいな温かい心になれたらいいなあ」と思うのでした。



# 生かされた 経験

それから数週間がたったお盆のこと、埼玉の実家に戻っていた雪江さんは、同じく帰省中の幼馴染の友人のもとを訪ねました。

久しぶりに会って、今の仕事や高校時代のことで話が弾みます。その話の輪に、途中からお茶を運んできた友人の祖母が加わり、あつという間に時間が過ぎました。

「これで失礼するわ」と切り出した雪江さんが、いただいたお菓子やお土産をかばんに詰めようとしたとき、うまく入りきりません。その様子を見た友人が、「紙袋を取ってこようか」と尋ねました。

雪江さんはその申し出に首を振り、「ありがとう。大丈夫、持てるから」と笑顔で答えました。

すると、友人の祖母が言いました。「紙袋じゃないけど、風呂敷ならたくさん集めているの。持ってきてあげるから、ちよつと待ってて」

祖母は、返事も待たずに、奥の部屋へと小走りで駆け込んでいきました。

その姿を見ていた雪江さんは、気をつかわせてしまったことを申し訳なく思いました。友人は、雪江さん以上に恐縮し



ています。

「ごめんね。うちのおばあちゃん、元気  
 なんだけど、こうと決めたら即実行の人  
 だから……」

そんな会話をしていると、手にたくさ  
 んの風呂敷を抱えて戻ってきました。

「いろんな柄があるのよ。こんなのがい  
 い？ それともこれかしら」

そう言いながら、畳の上に風呂敷を広  
 げていきました。友人は気恥ずかしそう  
 です。

「おばあちゃん、今の若い人は風呂敷な  
 んて使わないわよ。ほら雪江も困ってる  
 じゃない。もう、いいから……」

しかし、友人が止めるのも聞かず、風  
 呂敷を次々と並べていきます。

このやり取りを見ていた雪江さんの脳

裏に、福島伯母さんからたくさんの野菜をもらって困った経験がよみがえってきました。

「あのとときと似ているなあ。おばあちゃんの気持ちを快く受け取ろう」

雪江さんは、友人の祖母の心配りをうれしく思いました。そしてその説明を、相槌をうちながら聞きました。

雪江さんが緑色の風呂敷を選ぶと、友人の祖母は馴れた手つきでお菓子やお土産を包み、「はい、どうぞ」と言いながら差し出しました。雪江さんがお礼を言うと、自分の風呂敷が役に立ったことで、とてもうれしそうな笑顔を浮かべます。二人のやり取りや楽しそうな表情を見て、友人もほっとしたようです。

帰途についた雪江さん。歩きながら、

「今日は、風呂敷と一緒ににおばあちゃんの相手を大切に思う心を受け取ったんだ。大きな勉強をさせてもらったなあ」と感じました。



# 物の後ろにある思いに気づく



日ごろ、私たちは地域や職場、さらに親戚、知人など、お世話になっている人や身近な人などと人間関係を結んでいます。時によって、これらの人から品物やお土産を受け取ったり、贈ったりします。その贈り物には、単なる金銭的な価値だけでなく、贈る人の思いや願いが込められています。

雪江さんが、友人の祖母からもらった風呂敷にも、実は次のような意味があるのです。

——ひと昔前まで、「ふろしき」は贈答のシーンに欠かせないアイテム(小道具)

でした。しかし最近では、菓子折は手提げの紙袋のまま、金封は背広の内ポケットから裸のまままで差し出すといった光景が、あちらこちらで目につくようになりました。

包むという作法。その行為には一体、どのような意味があるのでしようか？

そのヒントは「包」という文字に隠されています。実は、「包」という漢字は、母親がその胎内に宿した新しい命を、抱え込むように守り慈しむ姿をかたどっていると言われているのです。さらに「包む」という行為には、中身を清浄に保ち大切に扱う気持ちと、渡す相手を敬う気持ちも込められています。（『れいろう』平成二十一年四月号「ふろしきのある暮らし」参照）

風呂敷の使い方から分かるように、日

本人は昔から物を渡すだけでなく、感謝、敬意などの思いを贈答品に込めてきました。

また、「二期一会」という言葉があります。これは、茶人・千利休の弟子である山上宗二の「一期に一度の会」という言葉に基づいています。人と人が会うのはその瞬間だけ、一回限りの出来事だと思つて誠意を尽くすべきだという教えです。もてなす人が「一期一会」の心でもてなすのであれば、もてなされる人もまた、



相応<sup>あひおう</sup>ずる心構えで、その思いを受け止めることが望まれます。

私たちは、プレゼントや手土産を「いただく」と言いますが、そこには単に物を受け取るのではなく、相手の気づかひや思いやりの心を受け取るという意味が込められています。つまり、相手や物に敬意と感謝を込めて「押し戴<sup>おおいただ</sup>く」ことでもあるのです。

このようにして、私たちはちよつとした気配りをして、相手の気持ちを受け取ることで、人間関係は円滑<sup>えんかつ</sup>になり、お互いに喜びを与え、与えられるようになります。豊かな社会になった今日こそ、いただき物の後ろにその人の思いやりの心があるということを常に思い浮かべ、感謝して受け取りたいものです。

